

No. 1

2023/9/1

小野友道の

お節介な戯言

手洗い（1）



手を洗う、足を洗う。ともに同じ抹消部を洗うという表現であるが、現代においてその意味は手と足でえらい違いである。「手を洗って清潔に」「やくざから足を洗う」といった具合である。しかし考えてみると、どちらも嫌なものから縁を切りたいという願いであり、意外に似ているかもしれない。「いい加減コロナ禍の娑婆から足を洗いたいものだ。」「コロナウイルス粒子を残さず洗い落とすんだ。」といった具合にである。

さて「手を洗う」ことはなんと2500年前からすでに行われていた。それは崇神天皇の頃、すなわち古墳時代に疫病が流行し、そのすぎましさは日本書紀に「国内に疾疫病（えのやまい）多くして、民死亡（ま）かれる者有りて、且大半（なかばに）すぎなんとす」とある。この頃、手洗いと口すすぎが始まったという。口すすぎはともかく、「手を洗う」はお詣りの前にお清めをするため、神社には手水（ちょうず）舎がつくられた。手洗いは決して消毒などを意識したものではなく、神頼みのためである。

それでは清潔や消毒を意識した手洗いが始まったのはいつ頃からか。大正7年（1918年）10月から始まったスペイン風邪（悪性感冒）、それはまぎれもなく今日のインフルエンザであるが、その流行時には、「病人は成るべく別の部屋に」、「含嗽せよ 朝な夕なに」、「汽車電車人の中ではマスクせよ」「予防注射（インフルエンザ菌という細菌に対するワクチンで無効であつが）と日光消毒」などのキャッチフレーズ付きポスターなどがあつた。しかし。この中に手洗いの文字はない。手から風邪が伝染するとは毫も思わなかったに違いない。まだその原因がウイルスであることもわからなかった時代である。それより60～70年前の19世紀半ばヨーロッパでも消毒を目的にした手洗いの習慣はまだなかった・医師・看護師においてもであつた。

ウィーン総合病院は1686年創立の伝統ある病院で、各国からこぞって留学生が集っていた。その病院の産科病棟で若い妊産婦の死亡率が異常に高い状態が続いていた。当時産科病棟は2棟あり、第1病棟は医学生の実習、2病棟は助産師のそれに振り分けられていた。死亡率は圧倒的に第1病棟に集中していた。なぜか、この疑問に挑戦した医師が次回紹介するゼンメルワイスというウィーン大学医学部を卒業したハンガリー生まれの医師である。卒後2年目の1846年ウィーン総合病院の第1産科病棟で働くことになった。元祖手洗い医師の奮闘を次回紹介したい。